「あなたがたは世の光です」
マタイの福音書５：１４－１５
August.27.2023

マタイの福音書５：１４－１５（パワポ）

Preface

「救い」とは何でしょうか？
キリスト教の言う、聖書の言う「救い」とは何でしょうか？
多様な表現があると思います。

でも、その中でも何よりもまず、「救い」とは、「イエス・キリストが、私の罪の身代わりとなって十字架に架かられ死なれたことによって、私の罪が赦され、死より復活されたキリストと同じ死んでもなお生きる永遠のいのちを与えられ、地獄ではなく、天の御国にて神とともに永遠に住まうこと」でしょう。
救いの教理を最も端的に言い表すならば、このような表現になると思います。

では、「イエス・キリストが、私の罪の身代わりとなり十字架に架かられ、死なれたことによって私の罪が赦され、死より復活されたキリストと同じ死んでもなお生きる永遠のいのちを与えられ、地獄ではなく、天の御国にて永遠に神とともに住まうこと」とは、具体的に何を意味しているでしょうか？
その本質的な意味とは何でしょうか？

もう少し分けて質問したいと思います。
私が罪人であるとは何でしょうか？
罪人であるところから罪赦されるとは、何を意味するのでしょうか？
罪赦された者として永遠のいのちを与えられ、神とともに永遠に住まうとは、何を意味するのでしょうか？

これらの質問にひと言で答えるならば、「身分の回復」です。
失ってしまった、本来備わっていたはずの身分の回復です。
この身分の回復ということについて、分かりやすく例えている例え話が、イエス様がお話しくださった放蕩の息子の話です。

ルカの福音書１５：１１－２４（パワポ）

Part One

まだまだピンピンしている父に向かって「遺産をくれ」と、「あんたは俺にとって死んだも同然の存在だ」と、父に対する死の宣告のような言葉を言い放ち、父との関係を断絶して手にした財産を湯水のごとく使い果たし、家畜の豚と同じような扱いさえも受けることが出来ない程に廃れ果てた放蕩息子が、深いた

め息と深い後悔を胸に抱いて絞り出した言葉が、「もう、息子と呼ばれる資格はありません」という言葉でした。
　落ちぶれてみて初めて、社会通念上、常識的に回復することは不可能な、自らの父に対する「身分の喪失」を自覚しました。

　今さら悔やんでも後の祭りのような「身分の喪失」に置かれ、獣以下の存在になったこの男に対して、「我が息子が帰ってきた！」と服をまくり上げて、まだ遠くにいる息子に向かって一目散に駆け寄り、汚くて臭くてたまらない程に落ちぶれた姿など露ほどにも気にならず、抱きしめ、何度も口づけし、我が息子としての「身分の回復」を表す最上の衣を着せて上げ、指輪をはめ、腹を空かせた息子に食べさせるために、家で一番良い家畜を屠って喜びの祝宴を始めました。

　これが、イエス様が私たちに教えて下さっている、私たちに及んだ「救い」です。
　本来備わっていた神の子という身分が失われていることにも気付かず、その身分の尊さを知ることも意識することも出来ずに放蕩していた。
　私という人をお造りになった父なる神の存在なんか知らずに認めたこともなく、むしろ否定までしながら、自らの存在意義までも見出せなくなるような神の子としての身分を失った状態から、ただただ、イエス・キリストにある神の恵みにより、神の子としての「身分を回復」させて頂いた。
　これが「救い」です。
　これを言い表しているのが、以前詳しく見ましたエペソ書１：５の御言葉です。

エペソ１：５（パワポ）

　「罪人である」というのは、本来あった神との関係が断絶され、神を知らず、神を認識出来ず、「神とともに生きて初めて人は人らしくあれる」という人が元々持っている人としての最大の特徴を見失い、失い、彷徨いながら、暗闇や深い靄の中で恐れていることにさえ気付けずにいた状態が、「罪人である」ということです。

　そして、「罪赦される」とは、断絶してしまった神との関係が、イエス・キリストの十字架の身代わりと言う仲介、橋渡し、取り持ちのために、神との関係が回復し、私が何者なのかということを知ること。
　私という人が本来何者で、何に陥ってしまい、その陥ってしまった靄や闇から引っ張り出されて、どういう立場に、どういう身分に回復させられたのかを知ること、これが、「罪赦された」ということです。

　さらに、「罪赦された者として、神とともに天の御国で、もしくは、新しい天と新しい地で永遠に住まう」とは、その回復させて頂いた本来あった身分よりも、イエス・キリストの贖いゆえにさらに素晴らしい身分となって、永遠にその身分

を享受させて頂くということです。
「ナルニア国物語」という小説や映画をご覧になった方々も沢山おられると思いますが、あそこに出て来るキリストを表すアスランというライオンのいのちの身代わりによって、本来持ち得ていた自らの栄光の身分を知らずに、戦禍における疎開という非常な現実の中で何かに怯えながら暮らしていたみすぼらしい４人の兄弟が、天の御国、新しい天と新しい地を表すナルニア国という国の王として君臨するようになる場面が出てきます。
正にあの場面のように、知らなかった、知る由もなかった、罪ゆえに霊的視野が閉ざされ、「神の子」としての本来の身分を知らずに、この罪な人間世界において、絶え間ない相対的な比較と対照によって毎日のように迫られる自らの足りなさ、欠け、未達、みすぼらしさや弱さばかりに捕らわれながら、その比較という物差しにおける勝者なのか敗者なのか、使える存在なのか使えない存在なのか、有益な存在なのか無益な存在なのかということに翻弄されながら、生きているようで実は死んでいたところから、
「私」という存在は、何かをもって比較されるべき存在ではなく、「使えない、役に立たない、値打が無い、期待外れだ」と能率や効率や費用対効果で評価されるような有害無益な存在でなんかでは決してなく、唯一まことの存在、天地万物一切合切のものをもってしても比較になんかならない、神の前にあって無二の尊い存在であると同時に、人の前にあっても、どんな人の前にあっても他に類を見ない絶対的な特別な存在であることを初めて、または認識新たに知ること、目から鱗が落ちるように悟ること、神ゆえに、キリストゆえに天地万物において王のような存在であるという身分を回復させて頂くこと、回復したその身分を、誰からも何物からも一切の妨げなんぞ受けずに喜び楽しみ享受すること、これが、「天の御国で神とともに永遠に住まう」ということの意味です。

つまり「救い」とは、聖書が私たちに教えてくれる真理・救いとは、「身分の回復」です。
否定とは無縁の、比較とは無縁の、罪を赦されたという恵みゆえの存在そのものの肯定です。

Part Two

始めに読みましたマタイの福音書５章１４節の「あなたがたは世の光です」というイエス様のお言葉は、クリスチャンになったばかりの大学３年生の私にとってどれほど嬉しく、どれほど解放と答えを得させて頂いた御言葉だったか分かりません。

それまでの私の生き方は、「光にならなければならない」ということを人生の目標としたものでした。
国語算数理科社会の点数をより多く取り、運動も出来、楽器も弾け、お金まで稼げ、人から褒められ、羨ましがられ、カッコいいと言われ、人に指示されていた者から人に指示出来るような者となり、教える者となり、有益だと、立派だと、

「使える奴だ」と称賛されるような「世のためになる光のような存在にならなければならない」という比較とプレッシャーと期待と淡い希望の中、霧の中をもがくように、鬱蒼と茂る道なき森の中を彷徨い歩くかのようにとりあえず進み、所々出て来るそれらしい目的地面した（目的地でもないのに目的地のふりをした）場所のようなところに辿り着いたことを喜び、束の間のその喜びと称するあっという間に消えて無くなる喜び面したものを消費した後、例えば、何かに合格するとか、何かを手に入れるとか、誰かから褒められるとか、リフレッシュとかという束の間の喜びを消費した後、また新たな目的地面した場所に向かって、「人生、これで良いんだ」と自らに言い聞かせながら、歩んでいるのか彷徨っているのか分からないような道程を、生きたようなふりして死んだように暮らしていたと思います。

そんな私が、主イエス様に出会い、主イエス様が私の心に魂に触れて下さり、読み始めた新約聖書のイエス様のお言葉、「あなたがたは世の光です」という言葉に生まれて初めて出会い、解放されました。　ホッとしました。　安心しました。「人を見る目を変えたい、変わりたい、自分を見る目を変えよう」と思えるようになりました。

何よりも感動したのは、「あなたがたは世の光となりなさい」ではなく、「あなたがたは世の光です」というｂｅｃｏｍｅではなく、ｂｅだということです。
何か優れた存在、何か有益なものをもたらす存在、何か光り輝かせなければならない存在に**なる**のではなく、「もう既に**そうなんだ**」と、「存在そのものが尊いんだ」と、「光だ」と仰って下さっているイエス様の言葉に光を感じました。
それまで、人間が作り出した提唱した、光面したまやかしの光を追いかけるよな答えのない渇望から、その光面したものになるように迫られていたところから引っ張り出された、解放されたような気が致しました。

「僕は既にこの世にあって光なる存在として神の手によって生まれさせて頂き、あの人も、この人も、あんな人も、『こんな奴も』と思っていたそのすべての人たちが、本来、光なる存在なんだ！」と、「僕が居なくなることは、この世の光が失われることであり、あの人が、この人が居なくなることも、この世の光が失われることなんだ」という人としての根本、人間模様の答えのような言葉として迫って来ました。
「あなたがたは世の光です」という言葉があまりにも嬉しくて、そして色んな人に知ってほしくて、友達たちに、「おい泉川、お前な、お前は神さまに愛されている存在だし、この世の光なんだよ」とか、「ねえ佐藤さん、あなたはね、愛されている存在だし、光なんだよ」と言いまくっていました。

もちろん、この「あなたがたは世の光です」と仰ったイエス様の言葉は、先ず第一に、キリストを信じる人に、信じるようになった人に向けた言葉であることは重々承知していますが、この言葉を語られた時の対象が、マタイ５章１節を見

ますと、「群衆」と書いてあるんです。
　つまり、キリストを信じる者たちは当然、まだキリスト信じていない者たちにも、イエス様は「あなたがたは、唯一まことの父なる神にあって、本来、光なる存在なんだ」と語り掛けておられるようにも見受けられるんです。
　キリストを信じていない者たちには、まだ自分たちが世の光なる存在であることが分かり得ていないけれども、神は、「あなたがたは本来、世の光としてわたしが造った、わたしの目には眩しいほどにの尊い無二の存在なんだと伝えたい、知って欲しい」と、私たちすべての人間に語り掛けておられる神のもどかしい愛の言葉のように感じるんです。

　この言葉は、イエス様が３０歳になって公生涯を始めなさって、初めて御言葉をお語りになった山上の垂訓での言葉ですが、以前ルカの福音書から見ましたように、イエス様は１２歳という幼い幼少期からもう既に、他の誰よりも、神の言葉そのものなるお方ですので、どんな立派な聖書教師たちよりも聖書の御言葉に精通しておられ、聖書の言葉をすべての大人たちが感嘆する程に、分かりやすく且つ権威をもってお話をされていました。
　もし１２歳という少年時代から活動を始められたら、「神童」と称えられながら、正に「生ける神の子だ」と称されながら、ちやほやされながら大いに活動出来たかもしれませんが、そうはされず、それから約２０年間もの間市井の人として、一庶民として、社会の最下層にあたる大工仕事をしながら、人々とともに暮らしました。

　その生々しい人々の人生の真っ只中でイエス様が感じた、見た、生きた、実感した、人々の暮らし、様子、人生の労苦や悩みやリアルな生き様をともに過ごした中で、「どういう言葉を先ず第一に掛ければ、この人たちにとって力となり、希望となり、元気となり、活力となり、解放となるのだろうか」とお考えになりながら、神の言葉そのものであられるお方イエス様が、人々に向けて語り掛けた言葉が「あなたがたは世の光です」という言葉でした。

　なぜに、「あなたがたは世の光です」という言葉だったのか？
　それは、皆が皆、自分が神によって造られた光なる存在であることを忘れて、知らずに、認識出来ずに、「光にならなければ」と比較され、比べられ、計られ、評価され、値踏みされながら、富と権力と教育などの外見的なありとあらゆる格差の中、もがくように、彷徨うように、自分の足りなさや弱さばかりが目に付き、人を羨み恨めしくも思い、目の前にあることだけで精いっぱいで、目の前にあることを何とかこなしながら、目の中の光を失っているかのように人々が死に生きているので、そんな労苦から解放し、そんな霊的盲目から救い出し、真理なる答えを教えようと、「あなたがたは世の光です」と語り掛けたのだと思います。
　「神とともに、キリストとともに生きて初めて人は人らしくあれる」という、「『人間』とい言葉と、『クリスチャン』という言葉が同義語であるという事実を隠され、自分が光として造られたことを知らずに、恐れ、度重なるサタンが人を

通して編み出した雑多な物差しによる比較と判断と裁きに傷つき、怯え、高ぶり、疲弊している人々の姿を見て、最大の慰めの言葉を真実として話して下さったのが、「あなたがたは世の光です。あなたがたは本来、世の光として造られた尊い存在なんです」という言葉の真意だと思います。

Part Three

今日は、障がい者福祉礼拝ですが、「障がい者」という言葉・単語ほど、「あなたがたは世の光です」というイエス様の私たち人間の存在そのものに関する真実の御言葉に反する言葉もないことでしょう。

イエス様の「あなたがたは世の光です」という言葉に倣うならば、本来、人には、障がいも何もありません。

一人の人が世の光として神によって造られ生まれてきたならば、「生まれてきたすべての人は、生まれてきたという事実だけでもう十分に、神の赦しと喜びの下生まれてきた世の光だ」ということです。

即ち、「障がい者」という概念は、「能率や効率や優勢・劣勢などの人の考えだした物差しによって編み出された偏見と不条理と偏りが、形として無理矢理表現されたものだ」と言えるでしょう。

利益やコストパフォーマンスやタイムパフォーマンス等という経済産業的物質主義的価値観に偏重した物事を見る目に、人間自ら捕らえられてしまって出来た人間の浅知恵、短絡さ、残忍さ、ずるさ、好き好み、偏愛などが形となって表立って社会に表れたのが、「障がい者」という言葉ではないだろうかと感じるのです。

もし、障がいという言葉が「弱い」とか「弱者」という意味を持つ言葉ならば、弱くなく、弱者じゃない人がどこにいるでしょうか？

私たち皆、弱い存在です。

このことを使徒パウロ先生は、第一コリントでこんな風に言っています。

コリント人への手紙第一１２：１４－２７（パワポ）

２２節で、「それどころか、からだの中でほかより弱く見える部分が、かえってなくてはならないのです」といっている通り、弱さを自覚する私たち一人一人は、無くてはならない存在なのです。

ある牧師先生が、「家族の中に弱い存在がいて初めて、家族は健康でいられる」と仰ったことがありましたが、正にその通りだと思います。

私には、腰の椎間板ヘルニアとか、ストレートネックとか、２回の手術を受けても中々抜けない肩の痛みとか、高血圧気味とか、原因不明の紅斑症とか、こう見えまして色々と体の弱さを抱えており、以前は、「主よ、癒して下さい。なぜ、あの人のように、この人のように、万全の体ではないのでしょうか」と恨み節を

並べながら祈っていたことがありましたが、神さまは、私の予想を遥かに越えて、私の健康を守っていて下さっております。

どういうことかと言いますと、体中悪いところだらけなので、毎日運動や筋トレをせずにはいられないですし、弱い部分をかばい補うためにしている運動や筋トレが、結果的に体全体の健康を保つのに大いに役に立っているということです。
私は神さまに、「弱きを取り除いて下さい。直してください。変えて下さい」と浅はかにも訴えるわけですが、神さまは、弱きを用いて体全体を強く健康に保っていて下さっています。
使徒パウロ先生の第一コリントの御言葉を、私自身のこの肉体をもって実感しすると同時に、人間関係においても、人同士の存在の尊さにおいても、「そうだなあ」と、時に適って思わずにはいられません。

牧師の中にも色んな人がいますが、牧師のくせして人に会うのが苦手で、人と話すのが苦手で、孤独に一人でいることを好む方がおられます。
でも、人に会うのが苦手な代わりに、孤独の中、聖書の御言葉と向き合い続け、祈り続け、神の御言葉を解き明かすことには熱心だったりします。
その逆もあります。
一人でいることが嫌で、御言葉を孤独の中で深く読み解くことは、牧師のくせして苦手だけれども、人と一緒にいて何かを人と一緒にやることは得意だという方がいます。
ハゼのようにジッとしていることが得意な牧師か、マグロのように泳ぎ続けないと死んでしまう牧師か、以前の私は、「そのどっちも牧師らしくない」と思っていましたが、私が尊敬している大きな教会を牧会しておられるある牧師先生の言葉にハッとさせられたことがあります。
その先生がこんなことを仰いました。
「私は人と会うことが苦手です。でも、一人で孤独な時間を過ごしながら、神の言葉と読書に没頭しながら、御言葉を取り次ぐ準備をすることにおいては、全く苦になりません。
だからと言って、私が正しいわけでもなく、私のような者がすべてではありません。
色んな牧師を用いてキリストのからだとして一つにして下さっているのは、神です。
批判する前に、我が身を、他者を感謝出来なければと思っています。」
アーメンです。

Part Four

ここ最近よく目にするニュースと言いましょうか、人を重んじると言いながら、人を重んじることが出来ていない私たちの姿を垣間見るような報道を目の当たりにしました。

それは、「弱い」というレッテルを社会から無理矢理貼られて、言葉ではとても言い表せないような悔しい扱いを、国や社会や人から受けておられる所謂、障がい者と言われる方々がいらっしゃるということです。

２０世紀初頭から、近代化という効率や能率などの経済産業的価値観の台頭によって、「遺伝的に劣悪な人間を減らし、優秀な人間を増やす」という優生学なる偏見の塊みたいな考えを採り入れた政策が、先進国と称する国々で進められてきました。

この日本でも、つい最近まで、障がい者の方々に無理矢理不妊手術を強いる優生保護法なる法律があって、その被害に遭った多くの方々が声を上げておられます。

ある９１歳になる聴覚障がいのある男性は、幼い頃から親からも、「アホ」「役立たず」と罵られながら育ち、就職しては障がいを理由に給料を６割に減らされ、でもそんな痛みを共に分かち合える伴侶になる女性に出会い、「たくさんの子どもとにぎやかな家庭にしたいね」と語り合い結婚し、念願かなって妻が妊娠しますと、お二人の親同士が話し合って、この妻なる女性に無理矢理堕胎手術を受けさせ、避妊手術までさせられてしまったという記事を見ました。

また、古くなった名古屋城復元を巡る討論会で、エレベーター設置を訴える男性に対して差別発言が浴びせられても、その場にいた市長や市職員は、その罵声を止めることもなく、あたかもコストパフォーマンスやタイムパフォーマンスなどの能率や効率にあかたもそぐわないかのような態度しか敢えて取ることしかしなかったというところに、未だにこの社会には、優生保護法などの悪魔の考えに染まっているような法律は無くなったかもしれないけれども、変わらず優勢思想が蔓延っているということが明らかな事実であるだけでなく、私自身も、所謂健常者だとして、そんな態度や姿勢を取ってきたことを正直に認めざるを得ません。

でもそんな中にあっても一方では、母親の胎内にいる時、酸欠状態になったことで脳性麻痺になったある男性を中心にして、その男性の生活を支えるリハビリの輪が大きな家族のようになり、むしろ肉体的に手助けをしている側が、そのリハビリの輪の中に入ることによって癒され、慰められ、力を与えられ、逆に肉体的にも精神的にも、励まされ、力づけられていると言う報道を目にしました。

この脳性麻痺のある男性のお母さんは、息子さんについた「重度障害者」という呼称に苦悩されながら、息子さんのリハビリを始めた時には、「健常者に近づけたい」という気持ちがあったものの、息子さんのリハビリの輪の広がりを一番近くで体験して、「私は幸せ者。生きるということそのものが尊いことを知っている大きな家族が出来たから」と思えるようになったと仰るんです。

「弱者」とされてきた人たちを中心に、むしろ、人々が寄りあい、命の尊さ、存在の尊さ、互いになくてはならない存在であり、一つのからだとして機能しているんだということを実感している方々も、すべてを統べ治めておられる神の

恵みとご支配の中、体現されております。
　私たち土浦めぐみ教会は、「皆が世に光である尊い存在であること」、「その光一つ一つが、キリストをかしらとする掛け替えのない体一つ一つの部位であることを追い求める群れでありたい」と願っています。
　そして、その姿が、世に対しても、光として映ることを願っております。

Conclusion

　最後に、からしだねの理念と土浦めぐみ教会の障がい者福祉理念を皆で読んで終えたいと思います。

　からしだね理念（パワポ）
　人は皆等しく、神様に創造され、愛されている存在であり、一人ひとりがそれぞれの使命を与えられ、生かされています。
　ですから、互いに与えられているものを用い合い、補いあって成長し、豊かな人生を歩めるようにチームで支えます。

　障がい者福祉理念（パワポ）
　１.障がい者の一人一人は、　神様に創造された、かけがえのない尊い命であることを告白します。それゆえに障がいを含めてその命が、神様の御手の中にあることを、厳粛に受け止め、その存在を喜びます。

　２.障がい者の一人一人とその家族は、　神様に生かされてきて、人の深みという宝を持っている方であることを告白します。それゆえに一人一人に、心をこめて寄り沿う支援を心がけます。それは、寄り添う私たち自身が、学び、成熟し、豊かにされることだからです。

　３.障がい者の一人一人は、神様に愛され生かされている神の子です。それゆえに、生活の不便さや、生きづらさや、差別の中でも、著しい寂しさに取り残されることなく、一日一日を豊かに生きる支援プログラムを提供します。

　４.障がい者の一人一人は、神様に期待されていて、神様へのユニークな奉仕を委ねられていると告白します。それゆえに、可能性と成長を共有して喜び合い、共に生きて行きます。

　５.障がい者の一人一人は、神様に導かれて、豊かな人間関係の中で生きることを期待されていることを告白します。それゆえに、一人一人が家族と、からしだねと、土浦めぐみ教会および地域社会のなかで、豊かな交わりを持てるように試みます。

　この理念に生きる私たちでありたいと願います。

一人の人が障がい者ならば、皆が障がい者であり、一人の人が世の光として造られたならば、神の赦しの下生まれてきたすべての人は、世の光です。
「世の光です」というイエス様の言葉から、誰一人として漏れる人はいません。
お祈りいたします。

祝祷：マタイ５：１４ａ